説教20210801出エジ16：9-15ヨハネ福音書6：24-35

「イエスは命のパン」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

イエスは命のパン、これが私たちの信仰です。私たちはこう信じて、命のパンをいただくために体を動かしていきます。心と体でこれを受け取るのです。私たちはイエスキリストを信じることで、このように働かされているのです。信仰と働きはこのように密接にかかわりあっています。私たちは信じる者の為に働き、献身をするのです。

宗教改革者ルターが「信仰のみ」と言ってから、私たちは少々その意味を曲解し、行いによらず信仰のみによって救われる、ということで、自分たちの行い、すなわち働きについて考えることが少なかったように思います。そこで、今日は私たちの働きについて黙想してまいりたいと思います。

ヨハネ福音書６：27に「朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。」イエス様は私たちに向かってこのように、働きなさいと言われています。このイエス様の言葉に耳を傾けてまいりましょう。イエス様は「永遠の命に至る食べ物のために」とはっきり言われています。私たちは、がむしゃらに、あるいは、ただ勤勉に働けばよい、という訳ではないのです。「朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために」働け、というように条件を示されると、では、私たちはいったいどのように働けば良いのでしょうかと悩んでしまって、立ち止まってしまって前に進めなくなるのではないでしょうか。「私たちはしてはならないことをし、しなければならないことをせず」という罪の告白の祈りが頭の中で渦巻くのではないでしょうか。そしてこの難問を解決してくださるのもまたイエス様です。私たちはまことにイエス様を信じることによって、私たちの働きの一歩一歩を具体的にイエス様から差し示されるのです。

　今私たちはこの社会の中で曲がり角に立たされているのではないでしょうか。コロナ渦中であることはさることながら、このコロナが終息した後に、私たちはどのように働くことになるのか、ということが大きな問題として頭をもたげてきているように感じます。コロナが終息した後の社会、それがどのようになるのかは、誰にも分かりません。ただイエス様のみがご存じです。私たちは全てをご存じのイエス様を信じて、やがてイエス様の体である教会でも、そしてこの世の中でも、主の平和とみ栄が現わされるものと信じていますが、それがいつになるのかが分かりませんので、悩みがつきません。

今日は平和主日礼拝ですので、私たちが今日立っている地点に至った歴史を振り返りたいと思います。私たちは第二次世界大戦後、勤勉を旨として、がむしゃらに働き、日本は一時は経済的に非常に繁栄し、その繁栄ぶりを世界に誇っていたときもありました。その後、経済的繁栄は終わり、今日の状況がやってきました。さて私たちは、果たして今まで「永遠の命に至る食べ物のために」働いてきたのでしょうか。振り返れば「朽ちる食べ物のため」に働いてきた、ことが多かったのではないでしょうか。私たちは悩み多き今日の状況の中で、今一度、イエス様を信じる信仰に立ち返って、反省していきたいと願います。来るべき次の世代が、「永遠の命に至る食べ物」、すなわちイエスキリストを知り、イエスキリストの為に働かされる世代となることを祈りつつ、今、私たちに課せられた働きを行っていきたいと願います。

「朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。」この御言葉は、比喩的意味も含まれていて、味わいが深いものです。私たちは折に触れて時間をかけてこの御言葉を味わうことが出来ます。これからそのいくつかの意味を紐解いていきたいと思います。先ず、分かりやすいこととして挙げられるのが、私たちは日々の腹を満たすために働くのではなく、将来の為に働きなさい、ということです。イエス様は、五千人に食べ物をお与えになったとき、弟子たちが5切れのパンと2つの魚を持って休むかわりに、弟子たちに五千人に食べ物を与える為に働くための仕事をお与えになりました。イエス様の目から見れば、弟子たちが内輪で腹を満たすよりは、多くの人の為に働く者となるほうが、よほど神の国に向かうための御心であったことでしょう。

　さて先日の木曜祈祷会で長老の方が奨励して下さいましたが、マルコ福音書の2章の、4人の友人が屋根をはがして病人をイエス様のもとに吊り下げ、病人が癒された話をされました。この時友人たちは協力してイエス様のために働き、イエス様の恵みを共有することが出来ました。この、恵みを共有するということが大事、というお話でしたが、私が、では、なぜファリサイ派の人たちはイエス様を信じられなかったのですか、と質問をしました。それに対して、「ファリサイ派の人々は、主なる神を知識や理論として頭では理解していたが、生活のうちに行う信仰として身に着けていなかったから」ということで皆さんのお答えが一致しました。「生活のうちに行う信仰として身に着けていなかったから」ということは今日の説教のテーマにもつながることですが、私たちは、イエス様から5千人に給食を配りなさいと、仕事を課せられた時に、神学の議論をしだすのではなく、素直にそのイエス様の言葉に従う信仰を身に着けていきたいと願います。

　さて、次に、「朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。」という御言葉から知らされることは、「永遠の命に至る食べ物」とは、この世にある腐るパンではなく、腐らないパン、すなわち霊的なパンを意味している、ということです。霊的なパンとは、イエス様が言っておられるように、イエス様ご自身のことです。より具体的に言えば、私たちが聖餐式で分け与えられるパンのことです。「永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。」というイエス様の命令も、意味深長です。私たちは信仰により、恵みとしてイエス様ご自身を受け取っていますが、そこにも、切り離せない形で、私たちの働きがある、ということです。思えば、聖餐式のパンも自然のままに実った産物ではありません。そこには、小麦粉を製粉し、それをパンに焼くまでの人々の働きの成果が詰まっています。このように私たちは信仰によって、図らずも一つ一つの働きへと導かれているのです。

イエス様は信仰と業とが同じであることを、「神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である。」というように言われました。それに対して群衆は「それでは、わたしたちが見てあなたを信じることができるように、どんなしるしを行ってくださいますか。どのようなことをしてくださいますか。」とイエス様に質問して、荒れ野でのマンナは永遠の食べ物ではなかったことを指摘しました。それに対しイエス様は「わたしの父が天からのまことのパンをお与えになる。神のパンは、天から降って来て、世に命を与えるものである。」とお答えになります。群衆が「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」と言うと、イエスは言われます。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渇くことがない。」

群衆がいつも欲しがった朽ちることのない神のパンとは、イエス様であり、またイエス様のもとにいて、その霊に満たされて、常に働かされる私たちのことも言い含んでいるでしょう。

さて、これまで「永遠の命に至る食べ物」について、先ずこの世での将来を見据えた食べ物、そしてこの世の物でない霊的な食べ物という二つの意味合いを見てきましたが、この世のことも、そののちの世のことも、食べ物ということでつながっているのは興味深いことです。イエス様は「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」と私たちに言われましたが、私たちは世の終わりまで、聖餐式のパンにあずかるのでしょう。イエス様は「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい。」と言って、私たちにパンをお与えになります。

中世ヨーロッパでは人々は、毎日のように聖餐式に預かり、聖餐のパンを食べていたそうです。なぜ当時の人々はそんなに聖餐のパンを求めていたのでしょうか。それは彼らが、霊的な飢餓、霊的な飢えということを実感していたからではないでしょうか。霊的な飢餓にあることは、イエス様を信仰し、イエス様により頼むことを得させてくれるでしょう。そしてその信仰者は、イエス様の為に働き、イエス様からの恵みを隣人たちと分かち合うものへとされていくことでしょう。このように黙想しますと、私たちは、最後に神の国で成し遂げられる救いの完成ということに、私たちの小さな働きの一つ一つがかかわっているということに気づかされるでしょう。

今の世は、この世での満足のほうに気をとられていて、この世での食事が出来なくなったらおしまいだ、という様な食料の飢餓をおそれる発想に陥ってしまっているようです。ですから現代において、霊的な飢餓ということを一口に言っても、理解されることはまれなことです。しかし私たちは、イエス様の十字架の死によって、自らの罪を赦され、新たな救いの命へと入れられている信仰者として、この世で霊的な飢餓があるということを、隣人に告げ知らせて行く働きを、主から担わされています。

　この世の飽食を追い求め、この世の飢餓をおそれながら働くことは私たち人間を間違いなく奪い合い、争いごと、戦争へと導くでしょう。それに対し、実は私たちがこの世で満ち足りないのは、霊的な飢餓状態にあること、イエスキリストを知らないこと、の為であることを告げ知らせて行くことで、私たちは恵みの為に共に働き、その恵みに共にあずかる者へと変えていかれることでしょう。

私たちは今日、イエス様から教えられたように、イエス様を信じて、その福音伝道のために働かされる者にされていることを喜びつつ、この一週間もイエス様の為に心を尽くして働いて行きたいと願います。

祈ります

天の父

私たちはこの世のことで頭がいっぱいになり、ともすると奪い合いやけなしあいをし始める愚かな者たちです。どうかこのような罪深い私たちをお許しください。

神の国をいつも見上げて、霊的な飢え渇きをいつも感じながら、主の御救いをともに求めさせて下さい。私たちがともに働いて、あなたに近づく一歩一歩を祝福し、この世の教会を豊かに祝し導いてください。

そして、私たちがあなたからこの世で担わされている多くの役割を果たす、新たな働き手を豊かにお与えください。

今、病の床にある方々を覚えます。主よどうかいつくしむ心によって、病人を慰め、苦しみを耐え忍ぶ力をお与えください。また御心によりその病をいやし、最後まで主を敬い、ついに永遠の御国に至ることが出来ますように。

主よ、私たちを疫病、大水、地震、飢餓からお救い下さい。今、その渦中にある方々を哀れみ、主の愛と真理によって、その災いから解放し、まことの幸いへと導いて下さいます様に。

父と聖霊と共に